

食品包装学校の第一期を無事終了して

一般社団法人 日本食品包装協会
理事長 兼 学校長 石谷孝佑

食品包装分野は、食品と包装資材、包装機械が係わり、食品の品質・安全性が問われ、包装資材などの環境問題が加わり、災害への「食の備え」が重要な極めて学際的・業際的で、一つの問題だけにとどまらない総合性が問われる分野です。そのためか、大学等では、食品も包材も機械にもそれぞれ学問領域があり、教育が行われているのですが、それぞれの横断的な領域の「食品包装」や「包装機械」などについては、重要な業際・学際領域であるにも係わらず、大学では教育が行われていません。

一方、中国では、食品加工は原料から包装まで必ずあり、多くの大学で「食品包装」が教えられており、「包装学博士」のコースまであります。

食品は、包装抜きでは殆んど加工・流通ができないのですが、消費者は「包装資材は単なるゴミ」と認識している人が多いようで、食品の「包装の重要性」に気が付いていません。そんな食品包装の学びに一石を投ずるべく『食品包装学校』を立ち上げました。

昨年の5月連休明けに開校した『食品包装学校』ですが、今までの講習会と違い、食品包装を体系的に学べる、ほぼ10ヵ月間という長丁場の学習の場です。その特徴は、日程の決まったリアルの講義ではなく、毎月4講座を、事前に送付したテキストを見ながら「いつでも、どこでも、何度でも」録音した講義を繰り返し聞くことができるというものです。

この教育システムは、コロナ禍で多くなったウェブ会議などからヒントを得て構築したものです。勉強する時間が限定されず、「いつでも、どこでも」という方式が歓迎されたようです。また、講習生側も、遠方からでも受講ができ、交通費も宿泊費もかかりません。学校を運営する当協会としても、会場を早めに予約したり、会場費を払ったりする手間がいらぬというメリットがあります。

これまで行っていた『人材育成講習会』（初級、中級）では、最初に講習生全員に、今の仕事、講習会を受けた動機、趣味などについて、1～2分の自己紹介をして頂き、夕方からの交流会・名刺交換会の話の切っ掛けにして貰いました。

ところが、今回の『食品包装学校』では、コロナ禍のためにリアルの自己紹介の機会が持たず、交流会も開催できず、その代替措置として何とか講習生同士の交流の機会を持って貰おうと『フォローアップ・ミーティング』を持つようにし、さらに業種・年齢横断的なグループ分けをして、その中でディスカッションをして貰う『フォローアップ2』も併せて企画をしました。この『フォローアップ2』では、各グループにリーダーを設け、主に環境問題について調査とディスカッションをして貰い、最後に発表会を持ち、成果を披露して貰うというものになりました。ここでも、残念ながらリアルの発表会は開催できませんでしたが、これにつきましては、驚くような充実した発表も多く見られ、大きな成果になったものと思います。

これまで1年間のコロナ下での学校運営の経験を経て、幾つかの改善が必要な点が明らかになり、第二期については、それらを改善しつつ運営を行う予定です。第一はリアルの交流会を多くすること、第二は夏8月の負担を軽くすること、第三は録音の質を改善することです。これらを改善しつつ、学校運営を進めていきたいと考えています。

私達は、冒頭に説明しましたように、自分達の業界だけではなり立っておらず、食品と包装資材と包装機械の業界は、お互いに交流することが重要であり、他分野からの技術導入も非常に重要です。食品メーカーの「食品の開発と生産に携わる人」、包材メーカーの「包材の開発と

生産に携わる人」、食品を包装するための仲立ちをする「包装機械の開発と生産に携わる人」は、自分達だけでは成り立たないことを何となく知っていますから、『食品包装学校』を通して異業種の人と気軽に話せる友人関係を作り、趣味などを通して仕事の話もできる仲間を作ることが大切だということを理解していただけるかと思います。

例えば、食品メーカーが新しい飲料を作ったとします。飲料は裸では加工・流通ができませんから、先ず容器・包装を考えます。ガラス瓶や金属缶や、紙容器やプラボトルや、チューブやカップ、今ではスパウトパウチなどもあります。まず、利用の場面と利便性などを考え、流通経路・流通温度、コストや賞味期限などを想定し、包装の材質と容量・大きさなどを決めていく必要がありますが、包装する機械はこれらの包装の条件によって大きく変わります。どのような加熱処理にするのか、無菌充填にするかで、容器が変わり、包装機械はまるで変わってしまいます。果汁はpHが低いので、ガラス瓶や金属缶の加熱殺菌は簡単にできますが、これを、風味保持を大切にすると紙容器に無菌充填となると、容器の供給から殺菌・充填装置まで大きく変わってしまいます。開発途上国に行くと、講演の後で「果汁を包装したい」、「ジャムを包装したい」、「お菓子を包装したい」などという質問・相談がたくさんきます。

このような対応が食品包装のリアルであり、日本は1960-70年代にこのような時代を通り抜けてきており、様々な容器包装を経験し、業界の常識が形成され、包装食品のマーケットが作られています。現在では、もっと細かい、輸送・開梱適性や、法律への準拠や、容器等の環境対応なども必要な項目になっています。

現在は、「技術等の秘密保持、セキュリティが重要」ということになっているようですが、日本の中では、親しい仲間を作り、ベースになる知識を共有していくことが食品包装分野では重要であるといえます。現代は、本来、外国との関係で「セキュリティが重要」になっていると思いますが、日本では、企業同士の競争も激しいので、これに対しても「セキュリティが重要」と言われているように思えます。その国内の競争が新しい技術・商品などを生む源泉になっているようにも思えますが、それが別の意味では「大きな技術」への発展を遅らせているようにも見えます。そのような内向きのセキュリティはほどほどにしないと「外国との競争に負けますよ」という考えが食品包装分野の根底にはあると思います。

同じ高校・大学などで生活を共にした友達でも、コンペティター同士になることもあります。気軽に仕事の話もするでしょう。できれば困ったときの相談ができるような仲間がいれば有難いものです。そんな仲間が、この一年間の教育の場でできるのかどうかは判りませんが、「あの時に一緒だったあの人に相談をしてみれば」というような、そんな仲間作りの機会にして貰えれば有難いと思っています。

2019年にオランダで開催された機能性包装シンポジウムに行った時に「ハッカソン」というディスカッションのやり方を経験しました。思い起こしてみれば、日本でも、途上国（シンガポール）でも、ハッカソンを複数回経験していたことになりましたが、この方式はアメリカで生まれた企業・国籍横断的なディスカッションの方法であるということを知りました。

一つの大きな目標を設定し、これに異業種の専門家が参加し、グループを作り、ディスカッションをして個々のグループの考え方をまとめ、報告しあって結論を出すというものです。このディスカッションに3日から1週間もかけるのです。この『食品包装学校』でも、目標を設定し、グループに分かれてディスカッションをし、結論を発表し合う機会を、以後毎回、設けたいと思っています。この実践のためにも、考え方の異なる異業種のディスカッションが重要になります。

ハッカソンは、情報関連の技術者（ホワイト・ハッカー）が集まり、マラソン方式で開発目標を設定するので「ハッカソン」と言われていますが、食品包装では、食品と、包装資材と、

包装機械の3者が集まって、テーマについて調べ、ディスカッションし、目標を定めるので、「食品包装に関するトライアスロンである」として、「食包アスロン」と命名しました。この名前は、「食品包装の明日を論じる」ことにも繋がります。毎回、新たな課題を設定し、明日に向けて議論をし、情報を交換できる仲間を作っていって頂きたいと思います。食品包装の明日を議論していくということで、皆さんの参加を大いに期待致します。